

国立国会図書館憲政資料室所蔵  
マッカーサー記念館文書解題

豊田 真穂

1. はじめに

マッカーサー。彼の名を知らない人は、日本には少ないだろう。「碧い眼の大君」という異名をもち、第二次世界大戦後の日本に、5年8ヶ月もの間、連合国最高司令官として「君臨」した。米国の陸軍元帥であるマッカーサーは、連合国による日本占領を研究するうえでも、太平洋地域における第二次世界大戦を知るためにも、米国の対アジア戦略を考えるうえでも、キーパーソンといえる。

マッカーサーに関しては、自伝をはじめ彼の側近による回顧録、そのほか伝記や研究書が、日米両国で枚挙にいとまがないほど出版されている。それは、マッカーサーが多くの人々の関心を惹き魅了した人物であることの証左といえよう。マッカーサーは、日本現代史における最も重要な人物のひとりであり、彼について知ることの意義深さはここで繰り返すまでもない。

このマッカーサーの名を冠した記念館が、米国東海岸、ヴァージニア州ノーフォーク市にある。ここには、図書や文書だけでなく写真や視聴覚資料なども含めた多くの資料が収集・保管されており、その一部をマイクロフィルム化している。そして、このマイクロフィルム化された資料の多くを、国立国会図書館（以下、国会図書館）憲政資料室が所蔵している。

マッカーサー記念館文書は、国会図書館が収集してきた「日本占領関係資料」と呼ばれる日本占領にかかわる公文書および個人文書のひとつである。それらの資料の中心は、占領政策の実施にあたった連合国最高司令官総司令部（GHQ/SCAP、以下GHQ）の資料だが、そのほかにも、占領政策の決定過程にかかわった諸組織、および日本占領関係者の個人文書が収録されている。こ

うした公文書と個人文書は、互いに補完し合うことで、占領政策をさまざまな角度から総合的・立体的に理解することに寄与している。本文書は、占領期のほぼすべての期間に最高司令官として改革を主導したマッカーサーの個人文書であり、国会図書館の「日本占領関係資料」の中でも重要な位置を占めている。なかでも本文書が特異なのは、マッカーサーの個人文書という域を超え、配下の幕僚の文書や知人の収集資料、さらにそのほか多くの寄贈文書を含んでいるという点だ。

マッカーサー記念館文書については、秦郁彦氏や袖井林二郎氏が比較的早い時期で紹介していた（後述の「主要参考文献」を参照）ことから、占領研究者のあいだには広く知られてきたが、記念館が所蔵する文書について網羅的に紹介した日本語の著述は、私見の限り見つからない。以下では、占領期の資料として重要なマッカーサー記念館文書を、国会図書館憲政資料室が所蔵するものに限って紹介する。まず、本文書に関連する範囲でマッカーサーの経歴を簡単にまとめ、続いて、彼の資料を所蔵するマッカーサー記念館の概略とその文書の概要を示し、その後、憲政資料室所蔵文書の解題を付しその紹介としたい。この小論が、マッカーサー記念館文書をもとにした新たな研究の端緒を開く一助となれば幸いである。

## 2. マッカーサー：その経歴

ダグラス・マッカーサー（Douglas MacArthur）は、数多くの功業を残した米陸軍の「五つ星の元帥」である。日本の占領統治に絶対的な権力を与えられていただけでなく、第一次世界大戦下のフランス、米植民地下のフィリピン、第二次世界大戦下の太平洋地域において、数々の功績をあげた。以下では、本文書と関連する彼の経歴を略述する。なお、後述の解題を参照する際に役立つように、丸括弧内に関連する資料群の憲政資料室における請求記号を付した。

### （1）マッカーサーの家族関係

マッカーサー記念館文書の解説にあたって、まず、マッカーサー家の歴史にも触れておこう。後述の解題にあるように、本文書にはマッカーサー一族に関する資料も含まれているからだ。

米国におけるマッカーサー一族の初代は、スコットランドのグラスゴー生まれのアーサー一世が、1825年、母サラに伴われてマサチューセッツ州チコピ

ーフォールズに移民したときにまでさかのぼる。アーサー一世は、ウィスコンシン州副知事、ウィスコンシン州第二巡回区裁判官、コロンビア特別区最高裁判所裁判官を歴任した法律家である。その長男、アーサー二世がマッカーサーの父である (MMA-7)。

アーサー二世は、ウェストポイント陸軍士官学校への入学を果たせなかったものの、南北戦争下で北軍に志願入隊したのち、米陸軍史上最年少で大佐となるなど勲功をたて、その後、各地の兵営に勤務した。そのうち、アーカンソー州リトルロックの兵営で、1880年1月26日、ダグラスが三男として生まれた。長兄のアーサー三世は海軍大佐となり、ダグラス自身は陸軍への道を選んだ (MMA-6)。

## (2) 軍人のキャリアを積んだ時代

マッカーサーは、父の果たせなかった夢、ウェストポイント陸軍士官学校への入学を実現し、4年間を首席で通し、1903年に優等で卒業した。最初の任地は、フィリピンだった。マッカーサーとフィリピンの関係は深い。もともと父のアーサー二世が1898年の米西戦争でフィリピンに派遣され、フィリピン占領軍司令官および初代軍事総督を務めていた。民衆に対する「温情ある政治」を行おうとしていた父の姿勢は、後年のマッカーサーの日本占領におけるモデルになったとまで言われている。

1905年、マッカーサーは、日露戦争後に駐日米国大使館付武官となった父に、副官として呼び寄せられ、両親と3人で8ヶ月あまりのアジア視察旅行をした。こうした経験から、マッカーサーは「陸軍きってのアジア通」との自負を抱くようになったとも言われている。

その後、マッカーサーは、大統領付武官、参謀本部勤務などを経たのち、第一次世界大戦時には「レインボー師団」(州兵部隊を統合強化したもの)を提案し、その参謀長としてフランスに渡った。この戦争で多くの勲章を授与されたマッカーサーは、帰国後、39歳の若さでウェストポイント陸軍士官学校長となった。その後、再びフィリピンに赴任したのち、1930年、陸軍参謀総長に任命された。こうしてマッカーサーは、軍人のエリートコースを歩んでいった。

### (3) フィリピン、そして太平洋戦争へ

1935年、マッカーサーは、フィリピン国民軍創設のため軍事顧問に就任し、フィリピン人を軍事訓練して海空軍を創設するなど業績をあげた(MMA-1)。ちなみに、このころ、ジーン・マリー・フェアクロス(Jean Marie Faircloth)と結婚している。

日本軍のフランス領インドシナ侵攻など極東情勢が悪化した1941年夏、マッカーサーは、フィリピン陸軍を米陸軍に編入した米極東陸軍(USAFFE)の司令官に任命された。12月8日の日米開戦後は、マニラが日本軍に占領されるなど苦しい戦いを強いられ、バターン半島に続きコレヒドール島で防衛にねばったが、ローズヴェルト大統領に懇請され、オーストラリアに脱出した。メルボルン到着の途上、マッカーサーは、「アイ・シャル・リターン(わたしは必ず帰還する)」と言い残し、フィリピンを奪還する決意を示した(MMA-2)。

1942年4月、米・豪・蘭等の連合軍、南西太平洋軍(SWPA)が創設され、マッカーサーはその総司令官に任命された。以後、マッカーサーは、太平洋諸島において反攻作戦を進めていくが、11月、フィリピン奪還のためのレノ作戦(いわゆる「蛙飛び作戦」)を発表し、翌年、ニューギニア島などで勝利をあげていった。1944年10月にはレイテ島上陸に成功し、フィリピン奪還を宣言。12月、マッカーサーは新たに創設された元帥の位に昇進した。さらに1945年1月、ルソン島に上陸し、翌2月には、バターン半島を制圧、マニラの解放、さらにコレヒドール島の攻略に成功した(MMA-16)。

このころ、マッカーサーの右腕として知られ、のちにGHQ民政局長となるコートニー・ホイットニー(Courtney Whitney)は、日本軍に対するフィリピン・ゲリラの訓練・組織化などを行い、米軍のフィリピン侵攻を機に一斉に蜂起する準備をすすめていた(MMA-15)。

1945年4月、南西太平洋軍を改組して米太平洋陸軍(USAFPAC)が設置され、マッカーサーはその司令官に任命された。太平洋艦隊司令長官ニミッツ(Chester W. Nimitz)による沖縄制圧、マッカーサーによる全フィリピン群島の解放など、日本の敗戦が間近に迫った8月5日、マニラの米太平洋陸軍総司令部内に軍政局が設置された。これが、のちに日本占領を行うGHQの母体となる(MMA-17)。なお、日本占領の軍事面をつかさどる米太平洋陸軍はそのまま併置されたが、1947年、韓国、フィリピン、琉球諸島等を含む地域にある米軍のすべてを統括するために新設された極東軍(FEC)に吸収され、マッ

カーサーはその司令官も兼任した（MMA-18）。

#### （４）日本占領時代

マッカーサーは、1945年8月13日、日本占領のための連合国最高司令官に任命され、同月30日、厚木飛行場に到着した。そして9月2日、東京湾に停泊していたミズーリ号上で、連合国を代表して降伏文書に調印した。「いまや銃声は止み、ひどい惨事は終わった……」というこのときの言葉は、2004年にワシントンDCに新設された第二次世界大戦の記念碑にも刻まれており、太平洋における第二次世界大戦の終結を象徴する言葉として、米国民の記憶に残るものとなった。

続いて10月2日、連合国軍は米太平洋陸軍総司令部の軍政局を発展解消させ、正式に連合国最高司令官総司令部（GHQ）を設置、民政面における占領統治が本格化した。こうしてマッカーサーは、米太平洋陸軍司令官であると同時に、連合国最高司令官として、占領下の日本で絶対的な権力者と見なされる存在となった。マッカーサーは、GHQ本部を皇居の内堀の側にある東京・日比谷の第一生命ビルに置いたことから、当時の人々に「堀端天皇」とも呼ばれていた。マッカーサーの権限は、極東委員会（FEC、米英ソの合意によって設立された対日管理機関）および米国政府の制約下にあったとはいえ、天皇と日本政府による国家統治の権限はマッカーサーに従属しており、実質的には、日本の最高統治者であった。

占領初期において、マッカーサーは、憲法改正に始まり、女性解放、労働改革、教育改革、財閥解体、農地改革など、非軍事化と民主化を柱としたさまざまな改革を主導した。また、いわゆる人権指令による政治犯・思想犯の釈放など戦争の重圧から人々を解放し、食料の緊急輸入やガリオア・エロア資金などによって日本国民を飢えから救済した。マッカーサーは、これらの業績から、改革者であり、解放者、救済者であるというイメージを日本国民に与えることに成功した。こうしてマッカーサーは、多くの日本人にとって尊敬と賞賛の対象となり、数多くの手紙や贈物を受けとっている（MMA-4）。

とはいえ、実際に日本の民主化政策を実施し、日本政府や国民に対して指示を与えたのは、GHQのスタッフたちである。GHQは、参謀部と幕僚部（特別参謀部とも訳される）から成る。参謀部は、情報収集や諜報活動を行う参謀第二部以外は、庶務事項と軍事事項を所掌した。幕僚部には、1946年8

月の時点で、民政局（GS）、経済科学局（ESS）、民間情報教育局（CIE）、天然資源局（NRS）、公衆衛生福祉局（PHW）、民間通信局（CCS）、民間運輸局（CTS）、統計資料局（SRS）、民間諜報局（CIS）、物資調達部（GPA）、民間財政管理局（CPC）、一般会計局（GAS）、高級副官部（AG）の13部局が設置されていた。なかでも、憲法改正や政治行政の民主化を進めた民政局や、財閥解体や労働改革など経済の各分野における広範な改革を実施した経済科学局、教育と文化面における民主化政策を担当した民間情報教育局は、有力な中枢部局であった（MMA-3）。

一方、マッカーサーの反共主義的な面や軍人としての性質は、冷戦体制下における「逆コース」のなかで濃厚になっていった。特に、南西太平洋軍時代からマッカーサーの腹心として、諜報を担当する参謀第二部の部長であったチャールズ・ウィロビー（Charles Willoughby）は、徹底した反共主義者として知られている（MMA-5）。また、ウィロビーは、1948年からゾルゲ事件の報告書を作成し、米国議会下院非米活動委員会に送付するなど、共産主義者の国際的諜報活動を暴露することに専心していた（MMA-8）。一方、朝鮮戦争が勃発するとマッカーサーは国連軍（UNC）の最高司令官に任命され、仁川上陸作戦を成功させた。しかし、戦線拡大を求めて核使用を主張したため、中国との全面対決を恐れ戦争終結を目指したハリー・トルーマン（Harry S. Truman）米大統領と意見の対立が激化した（MMA-19）。そしてついに、1951年4月、マッカーサーは、トルーマンによって、連合国最高司令官、米極東軍司令官、国連軍最高司令官、琉球民政府長官の任を解かれ、元帥の地位を残したまま退役した。

帰国後、米国議会上下両院合同会議で告別演説を行い、「老兵は死なず、ただ消えゆくのみ」と結んだ。その後、レミントンランド社の会長を務め、1963年には『マッカーサー回想記』（*Reminiscences*）の原稿を完成させた（MMA-4）が、マッカーサー記念館の開館直後の1964年4月5日、ワシントンの陸軍病院で死亡した。84歳だった。

### 3. マッカーサー記念館文書

#### (1) マッカーサー記念館

マッカーサー記念館は、大西洋に面したチェサピーク湾口に位置するヴァージニア州ノーフォーク市の中心部にある。ここはマッカーサーの母であるメリー・ピンクニー・マッカーサー（Mary Pinkney MacArthur）の生地であり、

マッカーサー自身もここを「自らが選んだ故郷」とした。1961年、マッカーサーは保管していた文書、蔵書、勲章そのほかの所有物をノーフォーク市に寄贈した。市は、これらの物品を展示するために、1847年建造の旧市役所を改装して、マッカーサー記念館とした。記念館はマッカーサー記念財団が一般からの募金を募り、ノーフォーク市が運営している。

1964年に開館した記念館には、記念展示館、映画館、売店、文書・図書館の4つの建物とマッカーサーの銅像がある。記念展示館の中央部、ドームの下にマッカーサーと妻のひつぎが並び、そのドームの周囲にある2階建ての展示室には、第一次世界大戦から第二次世界大戦、日本占領にわたるマッカーサーの個人史をつづる展示物が並んでおり、常時無料で公開されている。映画館では、マッカーサーの功績をまとめた短いフィルムを上映しており、売店には、マッカーサー愛用の黒塗りキャデラック車が配されている。

記念展示館の裏手に建つマッカーサー記念文書・図書館には、マッカーサーが所有していた5,000冊以上の図書と200万点以上の文書、8万点の写真、110点の映画、そのほか、視聴覚資料や新聞などが収められている。そのなかには、マッカーサーの私文書だけでなく、公人としてやり取りした書簡や報告書、覚書、指令などの公文書も含まれている。マッカーサーは、受け取った書簡の原本を自らが保管することが多く、さらに複製を作らなかったとされているので、マッカーサー記念館が保有する公文書のなかには、唯一無二のものもあるという。

## (2) マッカーサー記念館文書の概要

国会図書館憲政資料室所収のマッカーサー記念館文書は、マッカーサー記念館が所蔵する全70資料群(2005年現在)のうち、マイクロフィルム化されている20資料群、全1,034リールである。マッカーサー記念館所蔵の70の資料群のなかには、米陸軍軍事史研究所や米国国立公文書館、そのほか大学図書館などに保存されているマッカーサーに関連した資料を記念館が複製して収集したものや、寄贈文書などが含まれているが、マイクロフィルム化されている文書の大部分は、マッカーサー記念館のオリジナル資料である。

憲政資料室では、このマイクロフィルム化された20の資料群を改めて整理しなおして、受け入れ順に22の請求記号を付した。この文書は大きく分けて、①マッカーサー自身が保管していた私文書、②彼の側近や関係者等の個人文

書、③マッカーサー記念館が寄贈を受けた資料、の3つに分類できる。後述の解題において請求記号順に文書の紹介を行うが、以下では、上述「2. マッカーサー：その経歴」で触れた部分となるべく重複しない形で、この分類順にマッカーサー記念館文書の大略を紹介したい。

#### ①マッカーサーの私文書

マッカーサー自身が保管していた資料はさらに、マッカーサーが属した歴代の陸軍組織の記録、1945年から1951年までの電報類、マッカーサーの私信・書簡、その他の4つに分類できる。

##### 1) 陸軍諸組織の記録

フィリピン軍事顧問時代、米極東陸軍 (USAFFE) 時代、南西太平洋軍 (SWPA) 時代、米太平洋陸軍 (USAFPAC) 時代、連合国最高司令官 (SCAP) 関係、米極東軍 (FEC) 関係、国連軍 (UNC) 関係のそれぞれについてあり、特に、南西太平洋軍時代のものと連合国最高司令官関係は、膨大な量がある。これら陸軍諸組織の文書は、通信や公式通達、覚書、軍事作戦や各種報告書、日誌等が含まれる (MMA-1~3, MMA-16~19)。

##### 2) 電報類

マッカーサーと GHQ の幕僚部は、1945年から1951年までの期間、無線電報 (公式通達)、公式覚書、そのほか覚書などを、それ以外の文書とは分別して保管していた。これらは、通常はすべての公式電報を保管していた GHQ の高級副官部ファイルにあるはずだが、そこにはない文書が含まれていることもある (MMA-13)。

##### 3) 私信・書簡

マッカーサーは、公式文書とは別に私信や書簡を保存していた。私信とはいえ、実際には公式書簡が多数ある。1843年から1964年までの私的な書簡や多くの日本人・朝鮮人からのマッカーサー宛ての手紙、解任後の諸活動に関する書類などが大量に保管されている (MMA-4)。また、要人との往復書簡については、別のファイルに保存されており、ここに1945年から1964年までの芦田・片山・吉田の各首相との書簡 (首相在任期間以外のものを含む) が含まれる (MMA-14)。

##### 4) その他

マッカーサーのスピーチ、演説、声明の原稿や新聞雑誌記事の切抜きなどが

あり、年月日、主題、有名なフレーズなどの一覧が付けられたマッカーサー記念館作成の目録がある。また、1945年から1951年までの陸軍情報紙『パシフィック・スターズ・アンド・ストライプス』(*Pacific Stars and Stripes*)、および同じ時期の日本の英字新聞『ニッポン・タイムズ』(*Nippon Times*)が<sup>3</sup>、欠号なくまとめられている (MMA-10)。

## ②側近・関係者の個人文書

マッカーサーがフィリピンのバターン半島沖のコレヒドール島からオーストラリアに脱出したとき、運命を共にした「バターン・ボーイズ」と呼ばれる側近グループのうち、ウィロビー、ホイットニー、サザーランド (Richard Sutherland) の文書を中心に、そのほかの南西太平洋軍時代、米極東軍時代、連合軍最高司令官時代に活躍した数名の個人文書も残されている。

特に、参謀第二部長のウィロビーの文書 (MMA-5 および MMA-8)、民政局長のホイットニーの文書 (MMA-15) は大量にある。米極東軍時代からの参謀長であるサザーランドの文書 (MMA-12) は、マッカーサー記念館が米国国立公文書館のコレクションから複製したものである。

その他、南西太平洋軍時代に参謀次長代理であったイーストウッド (Harold Eastwood) の文書 (MMA-9)、米極東軍時代の秘書官であったロジャーズ (Paul Rogers) が記念館に寄贈した個人文書 (MMA-22)、自らが保管していた南西太平洋軍の軍事作戦やマッカーサーに関する記事切抜きのコピーを記念館に寄贈したヘスター (Weldon Hester) の文書 (MMA-21)、GHQ の主要な 5 部局に関する一般的な資料を含むスコグルン (Clifford Skoglund) 文書 (MMA-11) がある。

さらに、マッカーサーの父であるアーサー・マッカーサー (Arthur MacArthur) の資料には、1845年から1912年までの父に関する新聞・雑誌記事の切抜や通信・書簡がある (MMA-6)。また、マッカーサーの従兄弟であるマルコム・マッカーサー (Malcolm MacArthur) の文書 (MMA-7) も記念館が寄贈を受けたもので、マッカーサー一族の家系図が含まれている。

## ③マッカーサー記念館への寄贈資料

前述以外の資料として、一般から記念館への寄贈資料・文書類 (MMA-20) がある。これには、マッカーサー記念館が開館した1964年から1988年10月

までの期間中に、多数にわたる個人が記念館に寄贈した文書類（寄贈者の氏名ごとに分類）、占領下日本における研究調査に基づくプライバンティ（Ralph Braibanti, デューク大学名誉教授）の博士論文、1918年から1919年までの『スターズ・アンド・ストライプス』（*Stars and Stripes*）の完全な複製の3種類がある。

#### 4. おわりにかえて

以上のように、マッカーサー記念館は、マッカーサーが所有していた資料のほか、マッカーサーに関する諸資料を精力的に収集しており、マッカーサーとその功績について調査するうえで、有益な文書類の宝庫であるといえよう。このマッカーサー記念館文書を利用した研究としては、「私信」ファイル（MMA-4）に整理されている3,500通を含む、日本の一般国民が書き送った手紙を紹介した袖井林二郎氏の『拝啓マッカーサー元帥様』や、米国国立公文書館とメリーランド大学図書館で欠落文書を補いつつ、マッカーサーと吉田・片山・芦田の三首相間の往復書簡を編纂し分析した袖井氏編訳の『吉田茂＝マッカーサー往復書簡集 [1945-1951]』が著名である。こういった書簡類の研究以外にも、本文書を利用した多くの研究が蓄積されてきた。マッカーサーが公人であっただけに、マッカーサー記念館文書には米国国立公文書館その他が所蔵する文書との重複もあるとはいえ、この膨大な資料群は、いまだ研究対象となりえる数々のテーマを秘めていると言えよう。

マッカーサー記念館文書は、マッカーサーという人物を総合的・立体的に知るための資料としては言うまでもないが、占領期の資料として、または第二次世界大戦期の資料としても、有意義である。例えば、GHQ関係の文書や無線電報のコレクションなどが大量にあるほか、マッカーサーが米陸軍の太平洋地域における歴代の司令官であったことから、日本軍に対する軍事作戦や報告書、そのほかの活動を知るための膨大な記録や報告書が残されている。さらに、ホイットニーのフィリピン・ゲリラ組織に関するファイルや、ウィロビーのゾルゲ事件に関する資料、米国のフィリピン占領に関する記録など、さまざまな視点からの史料研究が可能である。

本文書は、マッカーサー研究や占領研究はもちろんのこと、日本現代史の諸側面にとっても有益な資料群であることを改めて指摘したい。以下に本文書の解題を付し、より多くの人が本文書にアプローチするための指針となることを

期待する。

## [マッカーサー記念館文書解題]

### 凡 例

1. 本解題は、国立国会図書館憲政資料室（以下、憲政資料室）が所蔵するマッカーサー記念館文書の解説である。この文書は、米国にあるマッカーサー記念館が所蔵する文書の一部である。
2. 本解題は、マッカーサー記念館が作成した目録をもとに再編成した。
3. マッカーサー記念館が作成したより詳しい目録（英語）は、憲政資料室で閲覧に供している。
4. 解題の記述は、憲政資料室の請求記号、マッカーサー記念館の資料群（Record Group, RG と略称）番号（括弧内に表記）、資料名、マッカーサー記念館が付したリール番号、全リール数（括弧内に表記）、一般注記、資料概要の順に記した。
5. 請求記号と資料群番号を冒頭に示し、資料名およびリール番号、全リール数は行を改めた。
6. 憲政資料室の請求記号および日本語の資料名を太字で示した。日本語資料名はマッカーサー記念館が付した英語資料名をもとに憲政資料室が作成したもので、英語資料名を等号（=）で結んだ。
7. 一般注記は行を改め冒頭に◎を付し、文書の種類や大まかな内容について記した。
8. 資料概要は行を改め冒頭に○を付し、マッカーサー記念館が整理した分類を踏襲しつつ、必要に応じて整理しなおし、資料群内の下層分類（および必要な場合には注記）を記した。
9. 憲政資料室において閲覧の際に必要な文書のリール番号については、同室で閲覧に供している英文の目録を参照のこと。

### MMA-1 (RG-1)

マッカーサー資料・フィリピン軍事顧問時代 (1935年～1941年) = Records of the U. S. Military Advisor to the Philippine Commonwealth, 1935 - 1941; Reel No. 1-3 (全3リール)

◎通信・書簡、報告、新聞切抜き。

○フィリピンの新聞各社の記事切抜き、指令、電報、ケソン大統領からの電報・手紙、フィリピン「国家防衛法」の原文、覚書、スピーチ原稿、新聞発表原稿、手紙、一般命令の複製、特別命令、ケソン大統領への報告、日本軍の上陸等報告 (1937年)、退役に関する通信・書簡・手紙、米国の新聞各社の記事切抜き、フィリピン大学発行の *Philippensian* (1938)、公式通達、声明文、備忘録、展示など。

### MMA-2 (RG-2)

マッカーサー資料・極東陸軍時代 (1941年～1942年) = Records of Headquarters, U. S. Army Forces in the Far East (USAFFE), 1941 - 1942; Reel No. 4-21 (全18リール)

◎通信・書簡、公式通達、日誌、参謀第二部(G-2)と参謀第三部(G-3)の日刊紙とその附録、保存資料。

○主に、米極東陸軍 (USAFFE) の参謀第二部および参謀第三部の日刊紙。ほかにも、マッカーサーの個人ファイル (通信・書簡)、参謀長のフォルダー、「マッカーサー日誌」、フィリピン大統領の行政命令、第七軍管区在比米軍 (USFIP) のプロパガンダ、声明文、参謀第三部のウッドハウス軍曹による日誌、報告などを収録している。

なお、米極東陸軍および在比米軍の通信・書簡は、MMA-17 にあり。

### MMA-3 (RG-5)

マッカーサー資料・連合国最高司令官関係 (1945年～1951年) = Records of General Headquarters, Supreme Commander for the Allied Powers (SCAP), 1945 - 1951; Reel No. 22 - 133 (全112リール)

◎対日占領に関する諸資料。具体的には、私的・公的な通信・書簡類、GHQ 外交局との往復通信・書簡、報告、SCAPINs、講和条約関係資料、極東国際軍事裁判所 (IMTFE) からの答申など。その他、覚書、一般指令、回状、対日

理事会の議事録、会見記録、最高司令官への覚書など。

○マッカーサーの専属幕僚が保管したもののみを収録。その範囲は、1945年8月から1951年4月の間の日本占領の政治目的に関するものである。通信・書簡、一般ファイル、GHQ幕僚部、日本人による嘆願、印刷物、の5つに分類。

### ① 通信・書簡

- 1) 一般…最高司令官の権限に関する文書、原稿ファイル、台湾、講和条約、日米安全保障条約に関する公式覚書など。
- 2) 日本降伏…日本降伏に関するファイル、日本人のファイル（通信・書簡）など。
- 3) 公式通信・書簡…年代順。
- 4) 陸軍省通信・書簡…発信者名のアルファベット順。
- 5) 総司令官に対する覚書…年代順。
- 6) 日常の会見・訪問記録…年代順。
- 7) 参謀日誌（1942年から1949年）。

### ② 一般ファイル

項目がアルファベット順に並んでおり、対日理事会に関するもの（マッカーサーのスピーチ、協議事項、議事録）、日本の産児制限（アルファベット順）、回状、共産主義者の世界戦略、国防総省、統合参謀本部指令、選挙、極東委員会、外国籍、一般命令、日本政府法令、国家安全保障会議、壘・独・日と琉球・朝鮮における米陸軍占領、新聞発表、SCAPINs（番号順）、特別命令、専属幕僚覚書、覚書と回状のインデックス、GHQの活動に関する国務・陸・海軍三省調整委員会（SWNCC）と国務・陸・海・空軍四省調整委員会（SANACC）文書のインデックス、重要人物雑資料、ウェーキ島での会談などの諸資料が含まれる。

### ③ GHQ幕僚部

- 1) 民政局…日本国憲法、選挙、国会、条約、政党、『日本の政治的再編成』（*Political Reorientation of Japan*）、日本政府機構報告（Report on the Organization of the Japanese Government）、日本における政府・政治の概観（Review of Government and Politics in Japan）、『日本・朝鮮における非軍事活動の月間総括』（*Monthly Summation of Non-Military Activities in Japan and Korea*）など。

- 2) 軍事諜報部 (MIS) …通訳翻訳部、日本軍解隊の進展、諜報ファイルなど。
- 3) 外交局 (DS) …通信・書簡 (アチソン [George Atcheson, Jr.] 政治顧問)、豪・英・中・ソなどの任務、国務省の政策など。
- 4) 天然資源局 (NRS) …農地改革、天然資源問題など。
- 5) 民間情報教育局 (CIE) …米国教育使節団、図書館使節団、人文科学顧問団など。
- 6) 経済科学局 (ESS) …在外日本資産、占領費用、日本経済統計、労働・労働組合、シャープ税制使節団、食糧・貿易など。
- 7) 国際検察局 (IPS) …極東国際軍事裁判の報告書、関連の諸資料など。

#### ④ 日本人の嘆願書

戦犯の家族・親戚からマッカーサー宛てに減刑・慈悲を求めた多くの嘆願書を含む。日本語。

#### ⑤ 印刷物

大量の書籍、記事を収録。特に、GHQによって編纂された、*Selected Data on the Occupation of Japan* 全5巻 (紙焼きした冊子は憲政資料室所蔵)。

フォルダーごとの詳細な目録は、マッカーサー記念館作成のものを参照。

### MMA-4 (RG-10)

マッカーサー資料・私信 (1843年～1964年) = General Douglas MacArthur's Private Correspondence, 1843 - 1964; Reel No. 725 - 907 (全183リール)

◎通信・書簡のなかには公式・準公式のものも含まれる。日本人・朝鮮人からマッカーサー宛ての手紙、『マッカーサー回想記』(*Reminiscences*)の原稿。通信・書簡は発信者名のアルファベット順、そのほかは年代順に整理。

○マッカーサーは、概して公式文書とは分別し、私的な通信・書簡 (少数ながら家族からの手紙も含む) を保存していた。これらは、実際には大部分が公式のものである。主題ごとに、以下の7つに分類。

#### ① 一般的私信・書簡

マッカーサーの私的な通信・書簡が大量にあり、いくつかの公的関係書類、大統領選挙計画等に関わる広範な通信・書簡が含まれている。政治的なものについての少数の書簡は、発信者名と出来事の目録がある。

② 1945年から1950年までの日本人、朝鮮人、その他からの通信・書簡

発信者名のアルファベット順に整理されており、多くは現物で英語、日本語、中国語、朝鮮語で書かれている。いくつかは公式翻訳の複製である。

③ アマチュア競技連盟と全米大学運動連盟のファイル

1963年、マッカーサーはケネディ (John F. Kennedy) 米大統領の依頼を受け、1964年のオリンピック出場者選出に際して、アマチュア競技連盟と全米大学運動連盟との協力を得るために尽力したが、その時の文書類。

④ 州からの招待に関するファイル

1951年の帰国に際し、州や地方諸機関はマッカーサーを招待したが、マッカーサーはこの通信・書簡を州名のアルファベット順に整理した。その上で、各州内では、彼を招待した諸機関の名前もアルファベット順に整理されている。それぞれに、マッカーサーによる返答が添付されている。米国外からの招待は最後に収録。

⑤ 楽曲のファイル

マッカーサーに贈られた彼を賞賛する音楽や、一般的に米国、自由、勝利、軍人などを讃える音楽の楽譜を収録している（「マッカーサー・マーチ」[“MacArthur March”] など）。作曲者の手紙が添付されている場合が多い。作曲者名のアルファベット順に整理されている。

⑥ 詩のファイル

マッカーサーを賞賛する韻文を収録してある。額・台紙付きや特大のものを除き、作者名のアルファベット順に整理されている。

⑦ 財務関係書類

1945年から1950年にわたる個人的な雑財務関係書類、銀行報告、投資、税などに関する書類を収録。

**MMA-5 (RG-23)**

ウィロビー資料 (1947年～1973年) = Papers of Major General Charles A. Willoughby, USA, 1947-1973; Reel No. 908-933 (全26リール)

◎通信・書簡、諜報報告、南西太平洋における諜報機関の歴史の複製、雑誌と書籍の校正刷り、ウィロビーが編集し発行した定期刊行物『海外諜報ダイジェスト』(*Foreign Intelligence Digest*) の複製。

○通信・書簡ファイル、印刷物、機密資料、諜報の4つに分類。

### ① 通信・書簡ファイル

ウィロビーが亡くなる 1972 年までの私的な通信・書簡が含まれる。日本、フィリピン、スペイン、ポルトガルに対する戦時・退役後のウィロビーの関心が、共産主義を中心として、多岐にわたっていたことがわかる。通信・書簡は、アルファベット順に整理されている。まとまった形で、「マッカーサーに関する書籍」（“Book: MacArthur, 1941-1951”）や「ウィロビーとマッカーサーに対する朝鮮戦争についてのインタビュー」（“Korean War: Interview with Willoughby and MacArthur”）、『マッカーサー報告』（*Reports of General MacArthur*）などもある。

### ② 印刷物

ウィロビーの著作、あるいは関連する書籍や定期刊行物が含まれる。アルファベット順に整理されている。大部分が、『海外諜報ダイジェスト』（*Foreign Intelligence Digest*）（ウィロビーが 1961 年から 1971 年に編集した国際共産主義と冷戦を扱う雑誌）と、『週刊クルセイダー』（*Weekly Crusader*）（福音主義の定期刊行物）のほぼ全てである。いくつかの公式諜報報告（例えば、『戦時における諜報：マッカーサーの諜報機関の略歴』（*Intelligence in War: A Brief History of MacArthur's Intelligence Service, 1941-1951*）や、『GHQ への左派潜入』（*Leftist Infiltration into SCAP*）など）も含まれる。

### ③ 機密資料

1951 年から 1972 年の間の資料を収録。

なお、本資料群の①から③には、1952 年から 1972 年の期間に関するものが大量にあり、第二次世界大戦期と占領期・朝鮮戦争におけるウィロビーの活動に関する資料はほとんど収録されていない。

### ④ 諜報シリーズ

序章と全 10 巻の構成で、南西太平洋軍総司令部、米太平洋陸軍総司令部、連合軍最高司令官総司令部、米極東軍総司令部等のそれぞれの諜報機関の活動報告、文書附録を収録している。

## MMA-6 (RG-20)

アーサー・マッカーサー資料（1845 年～1912 年）= Papers of Lieutenant General Arthur MacArthur, 1845 - 1912; Reel No. 934（全 1 リール）

◎新聞と雑誌の切抜きが主。そのほか通信・書簡や報告書。

○新聞・雑誌等の記事切抜き、手紙・書簡、『陸・海軍雑誌』(*Army and Navy Journal*)の原文書、アーサー・マッカーサー伝、南北戦争中の任務、メリー・ピンクニー・ハーディとの結婚文書、フィリピン任務関係諸書類(指令、宣誓書など)。

#### **MMA-7 (RG-21)**

マルコム・マッカーサー資料(1907年～1980年) = Papers of Malcolm MacArthur, 1907 - 1980; Reel No. 935 (全1リール)

◎家系図、注目すべき事柄の記録。

○通信・書簡・手紙の複製、新聞記事の複製(年代順)、家系図、ダグラス・マッカーサー二世(マッカーサーの甥)に関する新聞記事切抜き、退役後のダグラス・マッカーサーの新聞記事切抜き、マッカーサー一族に関する記事切抜き、記録メモ、雑誌記事の切抜き。オーレリア・ベルチャー(マッカーサーの祖母)の祖先、1953年にマルコム・マッカーサーが作成したマッカーサー家の家系図など。

#### **MMA-8 (RG-23)**

ウィロビー資料(1947年～1973年) = Papers of Major General Charles A. Willoughby, USA, 1947 - 1973; Reel No. 936 (全1リール)

◎諜報報告、各種報告書、雑誌記事切抜き、書籍の表紙、個人的な通信・書簡など。

○極東軍諜報局参謀幕僚、ゾルゲ事件に関する抜粋、付記、日本司法省刑事局の文書の公式翻訳(1942年)などを収録。

#### **MMA-9 (RG-22)**

イーストウッド資料(1942年～1953年) = Papers of Brigadier General H. E. Eastwood, USA, 1942 - 1953; Reel No. 937 - 940 (全4リール)

◎個人的な通信・書簡と写真(日本のカラースライドを含む)、公式報告の複製。

○以下の5つに分類。

##### ① 通信・書簡ファイル(1942年～1953年)

第五軍参謀長時代の通信・書簡が大部分を占める。発信者名のアルファベ

ット順に整理されており、多くが非常に個人的で家族に関するもの。1952年7月31日のイーストウッドの退役に関するデータは、主にフォルダー“F”と“R”にある（マッカーサー記念館によって作成された発信者名のリストを参照のこと）。

## ② 各種報告書類

「日本の天然資源に関する報告」（“A Report on Japanese Natural Resources” [1948]）、「ブラックリスト作戦の基本概要計画」（“Basic Outline Plan for ‘Blacklist’ Operations”）など。

## ③ 個人ファイル

主に、南西太平洋軍参謀第四部の参謀次長代理時代の通信・書簡。そのほか多くの一般将校との通信・書簡や、母や妻との書簡。家族関係のものもあるが、より重要な出来事も扱っている。1942年9月5日から1945年12月24日までのもの。

## ④ 昇進ファイル

マッカーサーやその他の人物による、イーストウッドを准将に昇進させようとした際の文書類。1947年5月12日から1949年2月25日まで。

## ⑤ 個人ファイル、ウィットロックとの往復書簡

1945年9月5日から1945年12月と、1947年11月から1949年3月までのもの。前者は米太平洋陸軍参謀第四部の機能・日常業務に関する内容で歴史的に重要なもの。後者は初めサン・アントニオ配置兵站部の部隊長、後に第十歩兵隊部の部隊長であったウィットロック（L. J. Whitlock）とイーストウッド間の通信・書簡。

## MMA-10 (RG-25)

マッカーサー資料・演説集ほか = Collection of Periodicals, Newspapers, Newsclippings, and Speeches; Reel No. 960-977 (全18リール)

◎定期刊行物、特に1945年から1951年初頭までの『パシフィック・スターズ・アンド・ストライプス』と『ニッポン・タイムズ』の完全な複製、マッカーサーのスピーチ原稿、様々な新聞・雑誌記事の切抜きなど。

○1933年6月13日から1964年1月までのスピーチ、演説、講演、声明のコレクション（おおむね年代順に整理されている）。主に、日本占領期間中のマッカーサーによる演説、声明、スピーチ、メッセージ、コメント、覚書、新聞

発表等を収録。ほかに、マッカーサーと交された手紙、電報なども含む。更に、マッカーサーに関する新聞・雑誌記事切抜き、そのほかスピーチの雑録。

マッカーサー記念館が作成した年月日、場所、主題、有名なフレーズを記載した目録を参照。

#### **MMA-11 (RG-31)**

スコグルン資料 (1945年～1951年) = Papers of Colonel C. E. Skoglund, USA, 1945 - 1951; Reel No. 997 - 1001 (全5リール)

◎記事切抜き、報告書、諸資料。製本された書籍もあり。

○1949年7月頃から1952年4月頃まで民政局公務課に在籍していたスコグルンが保管していた資料。民政局、経済科学局、民間情報教育局、公衆衛生福祉局、天然資源局、雑録の6つに分類。文書タイトルのアルファベット順に整理。

##### ① 民政局

『民政ハンドブック』(*Civil Affairs Handbook*) や憲法に関する新聞記事切抜きの英訳フォルダーを始め、連合軍の日本占領と統治に関する諸資料、民政局の報告、『日本の政治的再編成』(*Political Reorientation of Japan*) など。

##### ② 経済科学局

労働諮問委員会最終報告書、日本の食糧状況、経済科学局の報告書など。

##### ③ 民間情報教育局

米国教育使節団報告書や博物館・美術館、民間情報教育局の報告書など。

##### ④ 公衆衛生福祉局

公衆衛生福祉局の報告書を収録。

##### ⑤ 天然資源局

天然資源ほか、農業・漁業・林業のプログラム報告書など。

##### ⑥ 雑録

公文書と報告書、定期刊行物と新聞を収録。

#### **MMA-12 (RG-30)**

サザーランド資料 (1941年～1945年) = Papers of Lieutenant General Richard K. Sutherland, USA, 1941 - 1945; Reel No. 1002 - 1041 (全40リール)

◎米国国立公文書館が所蔵する資料からの複製。

○通信・書簡、軍事行動・計画・訓練・報告書、および諜報の3つに分類。

### ① 通信・書簡

公式のものとは個人的なものが含まれる。公式通信は、アルファベット順に整理。公式声明をはじめ、軍司令部や陸軍省との通信、一般通信、無線電信などが含まれている。個人的なものは、大部分が公式のメモ、報告、職務当番表、地図などで、個人的通信は、手書きの手紙、アチソン、吉田首相、サザーランドの父や義理の息子等からの手紙、マッカーサーとデレヴィアンコ対日理事会ソ連代表との会談記録も含まれる。

### ② 軍事行動、計画、訓練、報告書

空軍に関する偵察機報告書、1942年から1945年までの個人記録、航空機報告書、一般通信など。海軍に関する一般通信、地上軍の兵力報告書。そのほか、数多くの一般通信、写真、雑録報告書、日誌、報告書、公文書、幕僚研究など。

### ③ 諜報

アルファベット順に整理され、諜報要旨、連合軍地理局 (AGS) による書籍一覧や報告書、地勢ハンドブック、参謀第二部による敵状況の推定、一般通信、雑記録、雑報告など。

フォルダーごとの詳細は、マッカーサー記念館が作成した目録を参照。

## MMA-13 (RG-9)

マッカーサー資料・無線電報 (1945年～1951年) = Collection of Messages (Radiograms), 1945-1951; Reel No. 134-329 (全196リール)

◎日本および朝鮮における米国と国連の活動のすべての局面を扱う (発着報告から日本降伏政策への軍事行動、朝鮮戦争の目的、作戦指令を含む)。

○以前は機密扱いだった公式通達、クロスレファレンス文書、公式通達記録など。これらは、マッカーサーの幕僚により組織ごとに分類されている。

詳細は、マッカーサー記念館が作成した目録を参照。

## MMA-14 (RG-10)

マッカーサー資料・要人私信 = General Douglas MacArthur's Private Correspondence, VIP File; Reel No. 330-336 (全7リール)

◎「要人」との書簡、アルファベット順に整理。

○私通信・書簡の「要人」ファイルは私信とされているが、多くは公式文書であり、自筆文書コレクションと呼ぶ方がふさわしい。ここに収録された書簡・文書の多くは、MMA-3やMMA-16から移したものだ。大部分は、マッカーサーと通信・書簡を交わした著名な人物の直筆コレクションであり、若干ながら芦田、片山、吉田コレクションが含まれている。

#### ① 著名人との書簡

マッカーサーと通信・書簡を取り交わした著名な人物は、アルファベット順に整理された人物名ごとに収録。関係者全てが収録されているわけではない。収録された人物の目録はマッカーサー記念館作成のものを参照。

#### ② 芦田・片山・吉田との書簡

1945年から1964年までのマッカーサーと三者との通信・書簡。名前のアルファベット順に整理されている。吉田との書簡は更に年代順に整理されており、吉田・マッカーサー間の書簡を紹介したライフ紙の記事も含まれている。

### MMA-15 (RG-16)

ホイットニー資料 (1942年～1947年) = Papers of Major General Courtney Whitney, USA, 1942-1947; Reel No. 337-410 (全74リール)

◎米軍とフィリピン・ゲリラの訓練・組織・兵站学・主要な作戦に関する書類、有名なゲリラのファイル、米国の支持者、避難民、主要なゲリラ活動家のメッセージファイル、戦後の通信・書簡。

○フィリピン地域部長時代のホイットニーの活動に関するもの。GHQ 民政局の局長時代や退役後の活動については含まれていない。本資料群の大部分は、1942年から1945年までのフィリピンにおける日本軍に対するゲリラのレジスタンス運動の組織化に関する文書。重要個人ファイル、ゲリラに関する個人ファイル、フィリピン・プロジェクト、目録ファイル、印刷物の5つに分類。

#### ① 重要個人ファイル

ホイットニーの活動にとって特に重要な人物や主題に関するファイル。主に、ゲリラ活動、ゲリラ・レジスタンス運動の報告書、フィリピン・ゲリラ記録、無線電信記録など。文書のアルファベット順に整理。

#### ② ゲリラに関する個人ファイル

さらに、一般ファイル、個人ファイル、特別ファイルの3つに分類されており、それぞれのゲリラの指導者に関するきわめて重要な統計を収録。一般

ファイルは、年代順に整理。個人ファイルは、名前のアルファベット順に整理。特別ファイルは、偵察大隊と通信隊の人事について。

### ③ フィリピン・プロジェクト

文書タイトルごとのアルファベット順に整理されており、公式通達の抜粋、一般公式通達、ゲリラ記録に分類され、ゲリラ記録は更に一般ファイルと公式通達に分けられている。ホイットニーは、公式通達の抜粋を作成していたが、それはおそらく退役後の1956年に出版した、著書『日本におけるマッカーサー：彼はわれわれに何を残したか』(*MacArthur: His Rendezvous with History*)執筆の際に参照するためだったと考えられる。ゲリラ記録のなかには、フィリピン地域部の作戦・組織ファイルがある。このファイルは、避難民報告、情報報告の2つに分類できる。避難民報告は、フィリピンにおける日本軍の活動についてのフィリピンから密出国した米国人に対するインタビューであり、情報報告は、連合軍諜報局(AIB)から参謀長宛での公式通達参考資料である。ほかに一般ファイル内にはフィリピン地域部報告が含まれる。

### ④ 目録ファイル

ゲリラの人事と活動についての基本的な情報を迅速に利用できるように、ホイットニーと彼の専属幕僚が作成したもの。この目録(人名と主題をアルファベット順に整理)で、本資料群内の他の場所にある、より詳細な情報を探し出すこともできる。

### ⑤ 印刷物

フィリピンと日本の活動についての陸・海軍の情報で、出版されているもの。

## **MMA-16 (RG-3)**

**マッカーサー資料・南西太平洋軍時代(1942年～1945年) = Records of Headquarters, Southwest Pacific Area (SWPA), 1942 - 1945; Reel No. 411 - 581 (全171リール)**

◎通信・書簡、公式通達、諜報の要約、地理調査、接收文書、尋問記録、業務報告及び事後報告、歴史索引・目録。

○1942年から1945年の期間にマッカーサーの専属幕僚が収集した文書。主に、諜報文書、軍事活動計画と指令。特に、日本人捕虜に対する尋問と、接收した日本軍文書や出版物の翻訳と分析は大量にある。通信・書簡、諜報通信・書簡と文書、軍事活動と計画、雑録文書、目録カード、の5つに分類。

### ① 通信・書簡

公式通信（年代順）、公式通達、1945年のフィリピン政府との通信、新聞発表、マッカーサーの声明、1944年の南西太平洋軍の電話帳、司令官通信（アルファベット順）など。

### ② 諜報通信・書簡と文書

- 1) 軍事諜報部（MIS）の敵作戦計画要旨…年代順。
- 2) 軍事諜報部の日誌要旨…年代順。
- 3) 連合作戦諜報部（COIC）の状況報告…年代順。
- 4) 連合軍地理局文書…各々の地域研究が大量にあり（フィリピン、日本もあり）。ほかに特別報告、経過報告など。文書番号順。
- 5) 連合軍通訳翻訳部（ATIS）文書（出版物、広報、尋問報告、調査報告、情報誌、情報要請報告、敵出版物、最新翻訳、配布限定翻訳 [LDT]、ATIS 地点報告など）、軍事諜報部日刊声明・公式発表など。

### ③ 軍事活動と計画

作戦計画、幕僚作戦研究、基本作戦計画、参謀第三部の日刊軍事活動報告、月刊軍事活動要旨、軍事活動訓令など。

### ④ 雑録

通信、新聞発表、偵察大隊、連合軍航空隊、太平洋におけるマッカーサーの軍事作戦、軍事活動調査など。

### ⑤ 目録カード

全2リール。

マッカーサー記念館作成の詳細な目録を参照。

## MMA-17 (RG-4)

マッカーサー資料・米太平洋陸軍時代（1942年～1947年）= Records of General Headquarters, U. S. Army Forces Pacific (USAFPAC), 1942 - 1947 ; Reel No. 582 - 617 (全36リール)

◎主として、1942年から1945年の期間にわたる公式通達、通信・書簡、諜報及び作戦要約、覚書、指令、報告、西園寺・原田回顧録、軍隊及び1947年1月1日までの日本占領における活動を取り扱う諜報要約など。

○マッカーサーの専属幕僚が保存した記録のみを収録。幕僚たちが整理し保管した記録には、重複がある。米太平洋陸軍は1945年4月3日に設立された

が、通信・書簡に関しては、マッカーサーがオーストラリアに到着した1942年にまでさかのぼったものを収録。残りは、1945年から1947年1月1日までにわたり、陸軍と対日占領中の活動の一部を扱っている。一般ファイル、通信・書簡、諜報、作戦、公式発表・新聞発表、西園寺・原田回顧録、印刷物の7つに分類。

#### ① 一般ファイル

米太平洋陸軍と南西太平洋軍の一般命令、フィリピン政府の広報、連合軍、オーストラリア政府、マッカーサーの往復書簡、海軍資料など。

#### ② 通信・書簡

公的通信（アルファベット順）、陸軍省資料（文書番号順）、カード式目録（アルファベット順）を収録。

#### ③ 諜報

- 1) 一般ファイル…参謀第二部の敵軍状況予測、推定される敵軍の配置、マッカーサーの指令史、作戦手順、第六軍参謀第二部報告など。
- 2) 朝鮮における軍政部の活動要約など…年代順。
- 3) 参謀第二部の日刊諜報要旨…年代順。
- 4) 日本、朝鮮、フィリピンの占領動向。

#### ④ 作戦

「ブラックリスト」作戦、「コロネット」作戦、「オリンピック」作戦、作戦要約、活動指示（日本・朝鮮の占領）、参謀第三部の軍事活動報告（日付順）、参謀第三部日刊状況報告など。

#### ⑤ 公式発表と新聞発表

1942年4月から1945年6月までの公式発表、1942年3月から1946年9月までの新聞発表。

#### ⑥ 西園寺・原田回顧録 (Saionji-Harada Memoirs)

1930年代の日本における軍部の台頭を示す記録。西園寺公望の私設秘書だった原田熊雄は、日本の元老の活動について記録を取っていた。西園寺は、当時の日本の政界で最も重要な人物の一人。後に『西園寺公と政局』（岩波書店）として出版された原稿の一部を英訳したものとみられる。

#### ⑦ 印刷物

連合軍通訳翻訳部作成の出版物の目録。捕虜、化学戦、諜報、心理戦、占領初期などの様々な主題を扱っている。

マッカーサー記念館作成の詳細な目録を参照。

## MMA-18 (RG-6)

マッカーサー資料・極東軍関係 (1947年～1951年) = Records of General Headquarters, Far East Command (FEC), 1947 - 1951; Reel No. 618 - 707 (全90リール)

◎日本占領及び朝鮮戦争における軍事面。主として諜報要約・特別報告、業務報告、業務指令・計画、朝鮮戦争に関する覚書。通信・書簡もあり。

○極東軍の公式記録は、米陸軍省高級副官部あるいは米国国立公文書館に所蔵されている。通信、報告、公式通達、計画、要旨等を含む本資料群は多くの原資料を含む。本資料の大部分は諜報文書であり、次に多いのは軍事作戦と計画文書である。その他には、一般的な通信、朝鮮戦争通信、管理・人事の通信・書簡、指令、報告などがあり、これらの多くは、諜報、計画と軍事作戦の部類に入る。一般ファイル、諜報、軍事作戦・計画、琉球諸島における米軍政府の活動、印刷物、の5つに分類。

### ① 一般ファイル

空軍編成リスト、極東軍の回状、一般的な通信、朝鮮戦争に関する通信、台湾ファイル、一般命令、朝鮮に関するファイル、覚書の雑録、人事、新聞発表、渉外局の占領報告、特別命令など。文書タイトルのアルファベット順。

### ② 諜報

- 1) 一般ファイル…民間諜報局作成の日本の国家主義に関する報告書、朝鮮戦争における中ソ連合軍に関する報告書、覚書・公式通達の通信、朝鮮に投下された心理戦リーフレット、戦時中の日本の政党および占領下パージに関する民間諜報局による報告など。アルファベット順。
- 2) 民間諜報部…日本共産党とコミンフォルムに関する報告、ソ連領からの引揚げ者の共産主義教化に関する報告、定期刊行諜報要旨と対敵諜報部隊の管区戦地報告 (朝鮮戦争に関するもの) など。アルファベット順。
- 3) 軍事諜報部…日刊諜報要旨、諜報要旨の目録、敵文書 (朝鮮戦争中に北朝鮮と中国から入手した文書の要約・翻訳)、朝鮮戦争下の尋問報告、定期刊行諜報要旨、特別報告、領土研究など。
- 4) 諜報雑録…諜報要旨の特別版や極東における状況の詳細な予測など。

### ③ 軍事作戦・計画

極東軍の軍事作戦指導、「火薬」作戦等に関する諸文書、軍事作戦計画、参謀第三部軍事作戦報告など。

④ 琉球諸島における米軍政府の活動

『琉球列島における米軍政府の活動記録』(*Summation of U.S. Army Military Government Activities in the Ryukyu Islands*) の No. 1～12 と No. 23～35。

⑤ 印刷物

GHQ が編纂した *Selected Data on the Occupation of Japan* (紙焼きした冊子は憲政資料室所蔵)。極東陸軍と第八軍の司令部、軍事史官室編の極東軍創設から廃止に至る活動や極東情勢などに関する報告書『極東軍：1947年1月1日から1957年6月30日』(*The Far East Command : 1 January 1947 to 30 June 1957*)、極東空軍の『レファレンス・ブック』(組織、朝鮮での軍事活動、人事、諜報など)、付記に、ゾルゲ事件に関する司法省刑事局の日本語諸資料を含むウィロビー寄贈の『ゾルゲ事件の一部資料』(*A Partial Documentation of the Sorge Espionage Case*) (ウィロビーの自費出版)、朝鮮戦争に関するウィロビー寄贈の『敵への援助：朝鮮新聞の傾向』(*Aid and Comfort to the Enemy: Trends of Korean Press Report*) (ウィロビーの自費出版) を収録。

①から③までは、マッカーサー記念館作成の詳細な目録を参照。

**MMA-19 (RG-7)**

マッカーサー資料・国連軍関係 (1950年～1951年) = Records of General Headquarters, United Nations Command (UNC), 1950 - 1951; Reel No. 708 - 724 (全17リール)

◎通信・書簡 (李承晩との通信・書簡も含む)、国連への報告、近親者への手紙、作戦日報、作戦計画及び指令、日刊軍事活動報告など。

○国連軍・米極東軍等の諸文書のうち、マッカーサーが解任される1951年4月11日までを収録。大部分が、米政府による国連安全保障理事会への司令官報告であり、年代順・文書番号順に整理。参謀第三部日刊軍事活動報告 (年代順・文書番号順)、国連軍司令官の通信・書簡、李承晩との通信・書簡、一般命令・特別命令、朝鮮における国連軍の特別報告、新聞発表、司令官の公式声明、軍事作戦指令、参謀第一部人事要旨など。

## MMA-20 (RG-15)

寄贈文書 = Documents Donated by the General Public; Reel No. 941 - 959 (全19 リール)、No. 1062 - 1063 (全2 リール)、No. 1066 (全1 リール)

◎手紙、新聞・雑誌記事切抜き、冊子、写真ほか。

○一般の人々がマッカーサー記念館に寄贈した多様な文書類。雑寄贈文書、ブライバンティの博士論文、『スターズ・アンド・ストライプス』、の3つに分類。

### ① 雑寄贈文書

マッカーサー記念館が開館した1964年から1988年10月19日までに記念館に寄贈され、整理された文書類。寄贈者名のアルファベット順に整理。寄贈者が受け取ったマッカーサーからの手紙や、マッカーサー及び彼の功績に関する記事切抜き（第二次世界大戦や日本占領改革一般、退役後の活動など）、マッカーサーを記念した交響楽（1980年作曲）公演のプログラムなど。日本人研究者からの寄贈もあり。寄贈者個人とマッカーサー記念館とのやり取り（書簡）も含まれる。

### ② ブライバンティの博士論文

ブライバンティ (Ralph J. D. Braibanti) デューク大学名誉教授が、1949年にシラキュース大学 (Syracuse University) (政治学) に提出した博士論文 (“The Occupation of Japan: A Study in Organization and Administration”)。著者による寄贈。占領下日本における二年強にわたる調査研究の上、米国の占領政策を展開するための組織とその運営方法に関して分析した論文。政策遂行のためにどういった組織が設置され、組織内および日本政府・国民との関係においてどういった行政手続きが取られたのかという点を解明しようとしたもの。全978ページ。

### ③ 『スターズ・アンド・ストライプス』

1918年2月8日から1919年6月13日までの『スターズ・アンド・ストライプス』（全71号）の完全な複製。ズィウィック (Susan G. Zwick) の寄贈。『スターズ・アンド・ストライプス』は、第一次世界大戦期にフランスで創刊された米国遣欧軍の週刊紙。MMA-10に1945年から1951年までの太平洋版の同紙がある。

### MMA-21 (RG-43)

ヘスター資料 = Papers of Weldon B. Hester; Reel No. 1068 - 1069 (全2リール)

◎雑誌・新聞記事切抜き、作戦報告、書簡ほか。

○元米国赤十字社及びキリスト教青年会 (Young Men's Christian's Association, YMCA) 職員のヘスター (Weldon B. Hester) は、1945年2月から3月にかけて、フィリピンのコレヒドール島を奪還した米軍第34歩兵隊に従軍。このとき以降、バターン半島やコレヒドール島における軍事作戦や、南西太平洋軍の軍事活動、および第二次世界大戦を中心としたマッカーサーに関する雑誌、新聞の記事や書籍を収集。その後、これらをすべてコピーし、その多くをマッカーサー記念館に寄贈。このうち、1942年から1988年までのコレヒドール島とバターン半島に関する記事や軍事報告書・通信等のみをマイクロフィルム化。

それぞれの記事等の書誌 (記事タイトル、著者名、年月日) のリストは、マッカーサー記念館作成の目録を参照。

### MMA-22 (RG-46)

ロジャーズ資料 = Papers of Paul P. Rogers; Reel No. 1055 - 1061 (全7リール)

◎論文、草稿、著書原稿、日誌、通信、機密文書、書簡、執務書類、メモ (ノート・手記類)、指令文書類など。

○ロジャーズ (Paul P. Rogers) は、1941年10月から1945年9月まで、米極東陸軍に従軍し、マッカーサー司令官およびサザーランド参謀長の秘書官 (執務室責任者) を務めた。彼は太平洋戦線、特にフィリピン奪還において功績をあげ、マッカーサーの深い信望を得ており、間近で見えていた第二次世界大戦中のマッカーサーとサザーランドの関係を描いた二巻の本を、1990年に米国 Praeger 社から出版した (*The Good Years: MacArthur and Sutherland* および *The Bitter Years: MacArthur and Sutherland*)。本資料群には、この本やその他の論文の原稿、マッカーサー記念館ほかとのやり取り、および当時の資料 (通信、メモ、執務ファイル、指令など) が含まれている。

マッカーサー記念館作成の目録を参照。

### [主要参考文献]

Cohen, Theodore. *The Third Turn: MacArthur, the Americans and the Rebirth of*

- Japan*. セオドア・コーエン『日本占領革命：GHQからの証言』上・下、大前正臣訳、TBSブリタニカ、1983年。
- Finn, Richard B. *Winners in Peace: MacArthur, Yoshida, and Postwar Japan*. Berkeley: University of California Press, 1992. リチャード・B. フィン『マッカーサーと吉田茂』上・下、内田健三監訳、同文書院、1993年。
- MacArthur, Douglas. *Reminiscences*. New York: McGraw-Hill, 1964. Reprint, United States Naval Inst., 2001. ダグラス・マッカーサー『マッカーサー回想記』上・下、津島一夫訳、朝日新聞社、1964年。
- Manchester, William Raymond. *American Caesar, Douglas MacArthur, 1880-1964*. Boston: Little Brown, 1978. ウィリアム・マンチェスター『ダグラス・マッカーサー』上・下、鈴木主税・高山圭訳、河出書房新社、1985年。
- Rogers, Paul P. *The Good Years*. West Port : Praeger Publishers, 1990.
- \_\_\_\_\_. *The Bitter Years: MacArthur and Sutherland*. West Port : Praeger Publishers, 1990.
- Schaller, Michael. *Douglas MacArthur: The Far Eastern General*. New York: Oxford University Press, 1989.
- Whitney, Courtney. *MacArthur: His Rendezvous with History*. New York: Alfred Knopf, 1956. コートニー・ホイットニー『日本におけるマッカーサー：彼はわれわれに何を残したか』毎日新聞社外信部訳、毎日新聞社、1957年。
- Williams, Justin. *Japan's Political Revolution under MacArthur: A Participant's Account*. Athens: University of Georgia Press, 1979. ジャスティン・ウィリアムズ『マッカーサーの政治改革』市雄貴、星健一訳、朝日新聞社、1989年。
- Willoughby, Charles A. *MacArthur, 1941-1951*. New York: McGraw-Hill, 1954. チャールズ・A・ウィロビー『マッカーサー戦記』上・下、大井篤訳、朝日ソノラマ、1988年。
- 秦郁彦著、大蔵省財政史編『昭和財政史：終戦から講和まで』第3巻、東洋経済新報社、1976年。
- 思想の科学研究会『日本占領研究事典』、共同研究『日本占領軍』別冊、徳間書店、1978年。
- 袖井林二郎『マッカーサーの二千日』中央公論社、1974年。
- \_\_\_\_\_. 『拝啓マッカーサー元帥様：占領下の日本人の手紙』大月書店、1985

年。

\_\_\_\_、福島鑄郎『マッカーサー：記録・戦後日本の原点』日本放送出版協会、1962年。

竹前栄治『GHQ』岩波書店、1983年。

マッカーサー記念館ウェブサイト (<http://www.macarthurmemorial.org/>) last accessed on 9/17/04.

マッカーサー記念館リーフレット (MacArthur Memorial, Norfolk, Virginia).

マッカーサー記念館リーフレット (Douglas MacArthur Memorial Archives and Library, Norfolk, Virginia).

マッカーサー記念館作成ブックレット (Selected Speeches, Douglas MacArthur).

本小論の作成にあたっては、国会図書館政治史料課の非常勤調査員川口悠子氏をはじめ、課員の方々にご協力いただいた。記して感謝したい。

(とよだ まほ 前政治史料課非常勤調査員・日本学術振興会特別研究員)